

『山風、雷、珈琲と』

田原市 浦島カフカ

吹くからに 秋の草木の しをるれば

おむべ山風を 嵐といふらむ

田原に越してきて、早くも半年が経った。

ここは空が広く、雲の表情が豊かだ。故郷の長崎と比べ、山も少なく、空と同じように広い平野はどこまでも続いている。

雷も、とても美しい。こんなに美しい雷は見たことがない。

雷鳴とともに、重く立ち込めた雲は紫に照らされ、その刹那、光り輝く稲妻が、ちりちりと空中で発光する。

そして、とりわけ風が強い。

短い秋の終わりを告げる、そんな強風に吹き飛ばされそうになりながら、私の頭の中で冒頭の和歌がちらちらと霞む。

なるほど、これは確かに嵐である。長崎県民であれば、この強風を台風と呼ぶだろう。

あの山から、強烈な風が吹き降りてくるのか――。私は蔵王山を睨みつける。

どういふ冬がやってくるのだろうか。

私は田原の冬をまだ知らない。

最寄り駅まで徒歩三十分、図書館まで徒歩二十分、貝塚まで徒歩八分……。

思わずツツコミを入れたくなるような位置関係に面白みを感じられる香気な性格でよかった。

最近の習慣は、週末に喫茶店でモーニングをとることだ。先週は寝坊してしまって、午後から行ったけれど……。スタッフのお姉さんが「おはようござ……」まで言いかけて、すぐに「こんにちは」と言い直した。私がいつもモーニングの時間帯に来店することを覚えていてくれたのだ。

珈琲の上の生クリームは雲のように美しく、例の雷の音でも聞こえてきそうだ。

白く湯気の立ち昇るカップを持ち上げ、一口啜った。優しさと温かさで静かに満たされてゆく、身体。